



特定非営利活動法人

アーシャ

アジアの農民と歩む会

会報  
68号

子どもたちの栄養について聞き取り調査をする農村保健ボランティア



## 新たな年に夢を希がって

アーシャ理事 村上 和子

昨年の今頃は、コロナ禍2年目、そして、まだまだ新たな朝が見えてこない中で歩み出しました。

集まる事も制限される中で、何か、大切に夢を見ながら、子ども達に伝えて行けるのか！子ども達の笑顔が溢れる事が有るのか？との思いながらの、色々な活動を手さぐりで行って来ました。

コロナは、そんな中でも色々変異しながら世界中に驚異を突き付けました。人類への挑戦の様な気がします。しかし、コロナ禍の中での生活も少しずつ変わりました。私でもインターネットを使って、ズーム会議が出来るようになり、家にいても会うことが難しい人とひとの交わりをもつことが出来るようになり、文化の進歩、科学の進歩の凄さを感じています。また、その反面、人とひとの交わりの大切さを感じています。

インターネットの凄さと共に、子ども達が、人とひとの

交わりの中で成長して行く事で、心も身体も大きく伸びて行く中で、心が置き去りにされている事が危惧されます。

友達との日々の中での成長の大切さを置き去りにされている事も、これからの生き方にどの様に陰を落とすか？本当に、これからの課題が山積みになっている気がします。

そんな中で、まったくこれは人災としか言いようがない、ロシアのウクライナに対する侵攻が伝わり、世界中が今、コロナ禍の中での生活も制限されている時に、ロシアが確実に人災としか言いようがない事を起こし、これからの未来を担う子ども達の笑顔を人災で奪っている事をどうぞよく考えて下さる事を願わざる終えません。

孫が、ある時こんな事を呟きました。「何故、人の物を欲しがるか？何故、人の生活を奪うのか？誰もが、今置かれているところで頑張れると良いんだけどね！」本当にそうだと思います。また、ある知人が、「微笑みは、見出しなみ」と言われました。そうだと思います。子ども達から笑顔が無くなる事なく、人災が無くなる事を願います。



## 肌で感じるインドの変化

インド事業統括責任者・三浦 照男

雑踏する街を闊歩し、疲れたとばかり道路中央に横たわる牛たち、「ここはインドだ!」、と感じる光景です。人間と動物が共生することを善とし、殺生を嫌うインド哲学が古代より受け継がれてきたのです。「牛を屠殺する」または「牛の肉を食べる」と聞いただけで絶句してしまう程、インドのヒンドゥー教徒にとっては神聖な動物なのです。各地の祠の中には牡牛像をよく見かけます。これはシバ神の乗り物、そして全ての4足動物の守護神とされ、人々は日常的にこの像に花をささげ、お祈りします。近代化を急ぐインドにおいてこのような伝統的な日常生活に変化の兆しが見えてきています。

**近代化のうねり**は確実にインド社会に影響を与えています。5年くらい前から道路の拡張工事で整備が成され、それに伴いスピード上げて走行する車両が増えてきました。今まで悠然と歩いていた犬、猫、子牛等が引かれて死んでいるのをよく見かけるようになりました。先に述べた動物との共生、不殺生（アサンヒー）という伝統思想が近代的合理的主義によってかき消されようとしています。路上の牛たちを交通妨害、排除すべきという考えが徐々に受け入れられるようになってきているのです。実際、路上の牛は徐々に減っているのです。

**スマホ**の急速な普及で農村部でもそれを持ち歩く住民が目立つようになってきました。現在、インドにおいては商店での決済、PCR検査やワクチン証明書等がスマホと連動するようになっていきます。スマホは必需品とばかりIT産業を推進したいインド政府は色々な形で後押ししているのです。平均的なインド人にとって決してスマホは安くありません。が、それを持っていない者は「貧困、低教養、時代遅れ」とレッテルを貼られるような風潮になってきています。

スマホがインターネットとつながるようになったことで、国内外の情報をリアルタイムで入手することができるようになりました。衣服や持物、生活水準、行動様式等、地域を異にするものと比較するようになっていきます。比べることで、自らの価値観や伝統文化の特徴や他との違いを再認識すると同時に、それらが近代化の妨げになっているという反発心や反抗心も芽生えます。家族に守られ愛され幸せだと感じていた人達が、他と比較す

ることで農村生活にわびしさを抱かせるのです。収入が少ない、買いたいものが買えない、もっと金が欲しい。。。幸福感を味わうための近代化は人々に物質至上主義、拝金主義、利己主義を助長させ、満たされぬ欲望は幸福感を減退させるのです。

**ヒマラヤの小国ブータンの人々**は近代的な社会環境でなく、経済的には豊かでないのに「世界一幸せな国」として一躍有名になりました。1972年「国民総幸福量（GNH）は国民総生産（GNP）よりも重要であると、当時の国王が国民に提唱し、ブータンの精神文化の重要性を説いたのです。しっかりした信仰を持ち、衣食住に事欠くことなく、普通の生活をするのが幸福なのだ、という信念です。この精神文化はチベット仏教という信仰が土台となり利他主義、おもいやり、助け合いの行為が当たり前のように根付いていたこと国民だからこそ、国王の提唱が支持されてきたのです。

しかし、近年、鎖国的政策を改め、観光業や林業、農業事業を軸に近代化を推し進めてきました。その結果、「幸福だ」と感じる者が少なくなってきたというのです。イギリスで発行されている資料では2013年の同国の幸福度世界ランキング8位だったのが、近代化の推進後の2019年には95位に急落したのです。このように近代化は必ずしも人々の幸福感を高揚させるとは限らないのです。近代化の導入は技術や経済分野のみならず、社会が大切にしてきた価値観をも変えてしまう危険性をはらんでいるのです。

**インドは・・・**1990年代からインドは海外の技術や資本の導入をしながら慎重に近代化を図ってきました。地方都市においては、自転車からバイク、そしてバイクから車へと置き換わっていきます。特に中間層の人たちの消費意欲に目を見張ります。しかし、昨今、近代化の波が増幅しているようです。大学キャンパスでもジーンズとTシャツ姿の学生が急増し、伝統衣装で歩いている学生が少なくなりました。インドの若者たちの間で西歐的な近代化の受容願望が見てとれます。

インドは西洋と東洋の間に位置し、双方の地域に影響を及ぼしながら独自の文化や思想を育んできました。その価値観や文化は欧米で発展してきた近代化と相容れないものが多くあります。それをどのように折り合いをつけながら進んでいくのか、今後の課題となるでしょう。多様な民族、多文化、多宗教との共生を標榜するインドの大きなチャレンジなのです。





## コロナ禍とインド・ 変化の最中で思うこと

インド事務局長 川口 景子

インドでは、昨年12月から新たな変異株であるオミクロン株の感染が広がり、「またか。こういうことがずっと続くのだろうか」と思いました。1月に州によっては州境を閉鎖したり、週末ロックダウン、学校の休校を実施し、私たちが拠点を置くサムヒギンボトム農工科学大学もオンラインで授業のみになりましたが、ようやく2月半ばから通常になりました。

2年前の2020年3月からの急な全土ロックダウンの際は感染による健康的な問題は殆どありませんでしたが、UP州からは出稼ぎに出ている人が多くいるため、デリーやムンバイから歩きやヒッチハイクなどで戻ってくる人が多く猛暑で途中で倒れる人もいたと聞きました。また、食料や物資の調達はどうなるのかわからず、警察は暴力でコントロール、情報収集に訪問した県庁も機能しておらず、関係省庁でお互いに責任を押し付けあっているような印象を受け、不安な時期もありました。

昨年は、ホーリーやイースター礼拝の数日後、4-5月のデルタ株感染拡大の時は体調を崩した人が続出し、周囲でも亡くなられた方がかなりいました。それまで「コロナは政府のついた嘘である」という風潮のあった農村住民もようやくコロナの存在とその脅威を真実のものとして受け止めるようになりました。それでも、農村ではマスクをしている人はまずおらず、農村に関わらず、街中でもマスクをしている人はごく一部です。

アラバード有機農業組合で販売していた日本食材も、コロナ禍で日本人が帰国し、販売量が激減、在庫と農家さんへの支払いを抱えて不安な日々を1年半過ごしました。しかし、昨年秋からインドに戻られる日本人駐在員の方が増え、レストランも再開し、急に日本食材が市場で不足している模様で、組合の販売量も上がり、在庫が追いつかない状況です。コロナ禍では需要と供給のバランスが崩れ、経済活動に大きな波風がたったことを実感しました。

そんな中で、2-3月にかけて事業地であるUP州で選挙が行われました。4年に一度行われる知事選ですが、これ

まで中央政府の政権と同じ政党、インド人民党が議席を占め、オレンジ色の袈裟を来たヨギ州知事による政治が行われてきました。インド人民党は農村でも配給や泥壁で作られた伝統家屋からレンガの住宅を建築するためや、小規模金融などの自助グループを支援する補助金の支給政策をよく行ってきました。一方で、ヒन्दゥー教色を強く打ち出すことで、8割以上のヒन्दゥー教の市民に支持を求め、イスラム教やキリスト教などのマイノリティに厳しい一面があります。それ以外にも、牧師の逮捕や、肉屋へのライセンス発行停止、イスラム教徒の女性の被るベール着用禁止など、マイノリティの信仰や習慣を無視する法律が全国各地で発布されています。

また、海外からの寄付などの送金を受け取る口座を2019年11月に政府が規制を強めるようになりました。それ以降、マキノスクールの当口座が凍結対象となり、日本からの送金が困難になりました。理由は、大学の会計事務所が2年ほど海外からの資金の報告を怠ったとのことでしたが、会計事務所の方の話では、「海外からの送金は、キリスト教への改宗に使われると思われるため、政権が変わらないと取得できる気がしない」と、意気消沈気味。他にもキリスト教系の団体、マザーテレサで有名になったミッシヨナリー・オブ・チャリティー、国際NGOのアムネスティなどの1900近くの団体が海外送金受け取り口座を過去5年間で凍結され、3年間は申請できないとされています。

私たちの資金も日本からの送金があって、初めて可能になる活動が多いので、困難に直面しています。大学の公認会計士や上層部の私たちの活動に対する理解と支えで、なんとかここまでやってきています。コロナ禍では、国内の多くの非営利活動法人が資金不足に悩んでいると聞いています。さらにウクライナ戦争勃発で、現代において普通の住民への大規模な暴力が行われていること、専制政治や世界大戦への懸念、実生活では燃料が高騰してきているなど、「平和」という言葉の重さを再考する時を感じます。

こういった状況ではありますが、現地では農業、農産加工、手工芸品など、それ自体が自立した収入を得て運営できる活動を農村出身スタッフ自身ができるように一緒に働いています。その中でインドと日本のシナジーで生まれる思考やスキルの交流に、毎日成長させてもらっています。この毎日の小さな歩みの積み重ねが平和をつくることだと信じています。



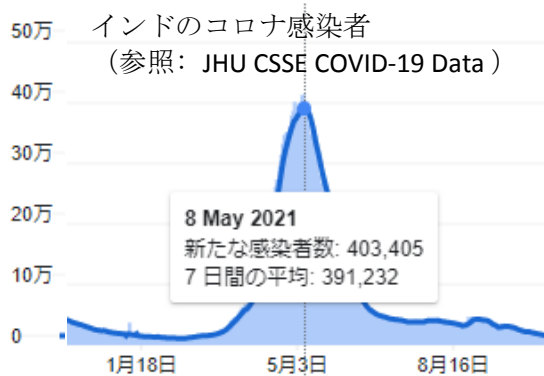
## 2021年度・コロナ禍でのマキノスクールの活動



インド活動現地での2021年度の幕開けは、まさかの新型コロナ・デルタ株の猛威から始まりました。3月中旬まで感染者が少なくなり、政府も多くの人も「コロナに勝った」と思いこみ、すっかり油断。日本でも報道されたように、病院や酸素ボンベ供給地での長蛇の列、まさに危機と隣り合わせの活動となりました。この年度を乗り越えてこられたのは、ひとえに支えてくださった皆様のおかげです。一人一人のいのちや人生の大切さを改めて覚え、みんなで寄り添い、亡くなられた方とご遺族に想いを寄せた、忘れられない年度となりました。また、財政面での困難にも直面しましたが、現地の農村住民が自立的に活動を継続できるようになるための体制づくりを下記のようにこつこつ、できることをして積み上げた1年となりました。どんな困難にあっても明るくたくましい現地の仲間と共に、感謝をもって、下記の写真報告を皆様にお届けします。ご支援ありがとうございました！

(文責・川口景子)

3月半ばよりコロナ感染がインド全域で広まり、ピーク時には一日41万人感染、4千人の死者となり、病床も火葬場も不足しました。マキノスクールの周囲でもワクチンは6月には現地でも打てるようになりましたが、ワクチン不足で待機しなければならない人も多くいました。



ガンジス川岸に埋められた遺体



50度の炎天下の中、RT-PCR検査のために長蛇の列に並ぶ人たち。街中の病院にて。



地元の朝市で豆腐やおからクッキーの直接販売開始。街の消費者との交流の場になりました。



デリー近郊での在印日本人関係のイベントに出店、農産加工品や手工芸品をアピールしました。



松田翼さん(左から2番目)は有機農業組合で2年間、関口明希(中央)さんは手工芸品部門で1年間活動、3月に帰国しました。

コロナ禍の困難に直面しましたが、農村開発の現場でインド人スタッフと関係を築き、多くの貢献をしてくださいました。

(写真: ホーリー祭)







豆腐製造機を導入し、農村女性が研修を受け、製造を開始しました。



TOFU COOKING SERIES #19 "TOFU TIKKA"

No views · 7 months ago · #tofu #tikka #soybean

0 Dislike Share Download Save

INDIA AOAC 17 subscribers SUBSCRIBED

インド向けの豆腐レシピを本やビデオにまとめ、普及に活用しました。



天候不順で世話が大変だった大豆栽培ですが、5月に収穫が行われました。その大豆で豆腐を作るサイクルができました。



支援金により、太陽光エネルギーで獣害対策フェンスを、モリンガや大豆、日本米栽培農家の農地に設置。



発育阻害のある子どもたちにモリンガ粉を配布し身長測定を定期的に行い健康と成長を追跡しました。



22人の農村女性と日本の専門家をオンラインでつなぎ、モリンガの栄養や今後の活動についてセミナー開催。



コロナ拡大の中、日本からのボランティア・関口明希さんが現地到着。言葉や文化の壁にぶつかりつつ農村女性の裁縫事業で活動開始しました。



農村保健ボランティアの普及活動で、モリンガの苗を、小規模生産グループの女性たちが村の農地に植林しました。



大きくなったモリンガの葉を収穫、パウダー加工。今年度は技術面での仕上げの年なので、衛生管理も自律的にできるよう研修を重ねました。



縫製事業では、現地で縫製・デザイン専門家コマル・ドヴェディさん（家政学部助教）との出会いがあり、週2回指導をしてもらえるようになりました。



ハルディー村で基礎裁縫研修を開催し、約50名の農村女性が基本的な縫製を学びました。最終試験に11名が臨み、9名が合格。



基礎研修の卒業生のうち7名がプロフェッショナル縫製研修コースへ進みました。先輩メンバーは指導と製作担当を分担、組織として成長しています。







## 農村女性ボランティア(VHV) への感謝

アーシャ代表理事・三浦 孝子

2020年1月30日、インドで初めて新型コロナ患者が南インドで発表されました。

(日本では1月16日)

私は何も知らず、例年通り、2月初旬から3月下旬ま

でマキノスクールに滞在し、モリンガ葉の加工作業やセミナー、農村の幼児の身体測定調査など、盛りだくさんの計画をこなすため日本を出発しました。帰国の近づいた3月半ば、UP州にも新型コロナ感染症が広がり、突然の外出禁止令、続いてロックダウン、フライトも列車の予約もすべてキャンセルとなりました。チャーター機で幸運にも帰国できたのは4月。以後、渡航できず2年が経過しました。

進行中のプロジェクトは、現地にとどまってくださった日本人スタッフ、インターン、そして、現地スタッフや農村保健ボランティア（以後、VHV）のみなさんに任せ、メールやZoom、Line、WhatsAppといったSNSも活用して、現地での活動の写真や動画をリアルタイムで送っていただくなどして、現在に至ります。

特に、VHVのみなさんには、2019年に始まり、今年3月



モリンガパウダーを配布するビムラさん（右）



2019年に開始されたプロジェクト当初VHVの育成のためのセミナー講師を務める筆者（中央）

で終了となった「北インドと日本をつなぐ食を通じた栄養改善プロジェクト」実施にあたり、大変お世話になりました。コロナ禍のため、村でのモリンガ栽培や食生活改善の普及活動を当初の計画通りには進めることができませんでしたが、できる時に実施するという体制をと

り、事業地の子どもたちの身体測定や母親へのインタビュー、モリンガ葉の栽培から加工に至るまで、日本人専門家不在でもスタッフと一緒に継続して実施してくれました。心から感謝しています。VHV達は、ある時は、ジャージー姿で耕運機を操作し、モリンガの苗を作り、村に行くときはサリー姿で村の女性たちに働きかけてモリンガ菜園を指導、また、定期的に栄養不良の子どもたちの身体測定を行って、モリンガパウダーを配布したり、ある時は、清潔な食品加工服に着替え、モリンガ葉の加工作業を集中して行ったり、と、今まで教わったことを、自信をもって逞しく活動を継続してくれました。また、現在も活動は継続しています。



村の子どもたちの身長測定をするVHVのシータさん

加工作業を終えたモリンガパウダーは航空便で日本にも届き、細菌検査後に国内事務所で小分けパック作業を行いフェアトレード商品として販売、現地に還元します。2021年度は常に在庫を切らさずに販売でき、売上は、2018年度の2倍以上、2020年度の1.5倍以上



を達成することができました。農村の女性の相談役、農村保健ボランティア（VHV）は、食生活改善のよき普及員でもあります。今後のVHVの活躍に期待を寄せています。

農村調査で身長測定を行うVHVのグディヤさん（左端）とアルティさん（身長計測中）



## ASHA STOREの1周年を迎えて

国内事務局・丹羽 寿美

昨年4月にアーシャのネットショップ「ASHA STORE」を開設して約1年となりました。この「ASHA STORE」は、2020年コロナ禍でイベントが次々と中止になり、ハンディクラフトやモリング等の直接販売が難しくなった際に、「アーシャの商品を必要としている全国の方にお届けしたい」「お客様より要望のあったクレジットカードやコンビニ決済ができるようにしたい」との思いから開設を決めました。

ネットショップ開設の際は、たくさんのサイトの中から、ネットショップ編集の自由度、決済方法、手数料等の比較をした中で、現在のショップに決めました。実際に運営を開始すると、従来の紙のカタログやホームページと比べ、一つの商品に対して15枚まで写真を掲載できるため、商品の魅力を今まで以上に伝えられること



2022/03/09  
人気の新商品（ブロックプリント・エプロン）が入荷いたしました。

2022/03/15  
新商品が入荷いたしました。

や、クレジットカードやキャリア決済、コンビニ決済なども利用できるようになったことは大きなメリットだと感じました。

しかし、課題もありました。一つはネットショップの存在がなかなか認識していただけないことです。ネットショップ開設だけでは来客につながらないため、会報やチラシで会員の皆様にお伝えしたり、Facebook等で広報するほか、ASHA STOREのInstagramを始めました。SNSでの効果的な宣伝ができるよう、今後も発信を行ってまいります。

もう一つの課題は、商品の写真です。ネットショップの場合は、写真が商品の魅力を伝えるためにとっても重要です。初めは、事務所で試行錯誤しながら撮影を行っていましたが、現在は、三浦孝子代表みずから、商品の特徴や良さを伝える写真を撮影してくださっています。ASHA STOREはハンディクラフトから販売を開始しましたが、2021年10月からモリング、12月から会費・寄付・募金の取扱いも開始しました。



ぜひご利用ください。

ASHA STOREに会員登録いただくと、いち早く新製品情報をお届けすることができますので、皆様にもご登録をお勧めします。ご来店を心からお待ちしております！

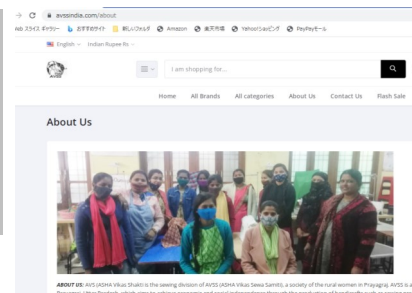


## 自立を目指して！現地での縫製品販売体制づくり

インド事務局長 川口 景子

昨年の秋頃やっとコロナ感染者が少なくなり、さて、これからインドに海外からの駐在者や旅行者が戻ってくる、インド土産路線の手工芸品もまた売れるようになる、と期待していると、なんと今度はオミクロン株が流行し始めました。もはやインド土産路線は安定的市場として見込めなくなりました。しかし、アーシャは、AVSSの現地での縫製品販売を促進するための手段として、次の2つの体制を築くことを目指しました。

一つは、インド全国に向けて、発信と販売が簡単にできるように、ショッピングカート機能付きのウェブサイトを立て上げました。インドではすでに、生地から制作している会社が素敵な生地と共に縫製品を販売しており、競争が激化しています。手に取ってもらうには、何らかの価値をアピールしなくてはなりません。インドの消費者が求めているものを知り、農村女性の自主的な活動、日本とのコラボなど、どの面を強調していくか、今後の課題になっています。



インドのAVSSオンラインサイト

2つ目は、農村女性自身による地元での販売体制です。これまでは、農村女性が消費者に直接販売することは、壁が高く感じ、しり込みしてしまう現実がありました。しかし、少しずつ一緒に外に出

て、話し方、商品の説明の仕方、価格の取り決めなどをしていくことで、自信がでて、近くのお店に自ら売りにできるようになりました。12月からは他のスタッフがいないくても、彼女たちだけで市街地のイベントでの出店を達成。街に出ることを怖がらなくなりました。縫製員の数も増え、検品や指導などの役割を分担してチームとして成長したことで、外に販売しに行けるスタッフがでてきたことが背景にあります。今後のメンバーの活躍に注目です。



市街地の催し物に出店する農村女性



※ 2022年度の会員のご継続と会費納入をお願い申し上げます。ご支援ください。

## アーシャ会員・理事懇談会

12月11日(土)、会員・理事懇談会を開催しました。北海道、福島、栃木、東京、愛知、三重、福岡、インドをオンラインで結んで16名が参加されました。まず、インドのコロナ第2波(3月~7月)の状況が報告されました。続いて、大豆事業(外務省)、モリンガ事業(味の素)、縫製事業(アジア生協)、国内収入向上事業の概況が報告されました。

大豆事業は5月で終了しましたが、農村でも都会でも豆腐は売れるようになり、豆腐製造は継続しています。モリンガ事業では栽培の定着を図るとともに、皆様から寄せられた募金を活用して村の幼児にモリンガパウダーを配り、栄養改善の促進を図っています。一方、野生動物が大豆やモリンガを食べてしまう被害が多く、日本青年会議所の支援金を利用して電柵を複数設置しました。縫製事業は現地の縫製専門家から継続指導を受け、商品の改良・開発を行っています。国内事業は取扱店の加増、出店販売促進、通販サイト「ASHA STORE」の運営により収入向上を図っています。国際NGOの中で、日本人スタッフが4名も駐在し、複数の現地事業が同時進行しているのは珍しいケースだそうです。オンライン会議にも慣れて、画像を多用して活動の報告を行い、様々な意見交換を行うことができました。

## 「世界にあなたの声を」に賛同

ウクライナ情勢が緊迫しています。アーシャも加入している国際協力NGOセンター(JANIC)では、国家の枠組みを超え、市民の声をあげていくイニシアチブを立ち上げました。市民あるいは市民社会組織の力の一つ一つは小さいものですが決して無力ではなく、一人ひとりが声をあげ続けることで、平和な社会への大きな流れを創り出すことができます。アーシャは、ロシア・ウクライナ戦争に対し、国家を超え市民の声をあげる「世界にあなたの声を #voiceforpeace」に賛同することを表明しました。



<https://voiceforpeace.world/>

同じ時代、同じ世界をともに生きる市民として、平和をとり戻すために努力を続けるウクライナとロシア及び全世界の市民に連帯の意を示します。ご理解・ご賛同を賜りたいと存じます。何卒よろしくお願ひいたします。

## 事務局よりお知らせ

会費・寄付ありがとうございました。2021.11.16~2022.3.25 順不同、敬称略  
誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡ください。よろしくお願ひいたします。

正会員	【北海道】横山明光【山形県】志藤正一【栃木県】村上和子 【埼玉県】川口良樹, 川口定子, 二宮牧雄【愛知県】伊藤幸慶, 岡秀雄【熊本県】高丸和彦
賛助会員	【北海道】長谷川照美【山形県】大内朋子, 長南正明【栃木県】三浦邦彦, 菊地紀子 【東京都】上遠恵子, 吉田千佳子【神奈川県】柴田有【大阪府】山本よし子
終身個人賛助会員	【静岡県】古橋克己
一般寄付	【北海道】長谷川照美, 平野伸吾【山形県】志藤正一 【栃木県】宇都宮松原教会, 那須塩原教会, 西田京子, 村上和子【埼玉県】二宮牧雄 【東京都】鶴川教会, 吉田千佳子【神奈川県】湯本浩之【島根県】吉崎彰一
指定寄付	【山形県】荘内教会保育園【栃木県】大浦智子, 西那須野教会【群馬県】島村めぐみ保育園 【埼玉県】外山明子【神奈川県】柴田有【島根県】吉崎彰一

- 会費 個人正会員 5,000円 団体正会員 20,000円 終身個人正会員 50,000円 終身団体正会員 100,000円  
個人賛助会員 3,000円 団体賛助会員 10,000円 終身個人賛助会員 30,000円 終身団体賛助会員 50,000円
- 郵便振替 加入者名: アーシャ=アジアの農民と歩む会 口座番号: 00160-0-315147

マキノスクールは、インド、ウツタル・プラデシュ州ブラヤグラージで活動するサム・ヒギンボトム農工科学大学にある学部で、本会が主に支援している団体です。実施している事業は、アーシャの会員の皆様からの会費・寄付ご支援、日本政府の無償資金協力や国内の助成財団からの助成金のほかに、インド三浦後援会、日本国外の様々な団体、個人の皆様からのご支援によって運営されています。プロジェクトを実施するにあたり、日本の皆様からの多大なご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人 **アーシャ=アジアの農民と歩む会** ☆この会報は日本で製作・印刷しています☆

<事務局・交流センター> 〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17 TEL: 0287-47-7840 FAX: 0287-47-7841  
事務局 朝比奈宏、丹羽寿美 E-MAIL: info.jp@ashaasia.org ホームページ: http://www.ashaasia.org